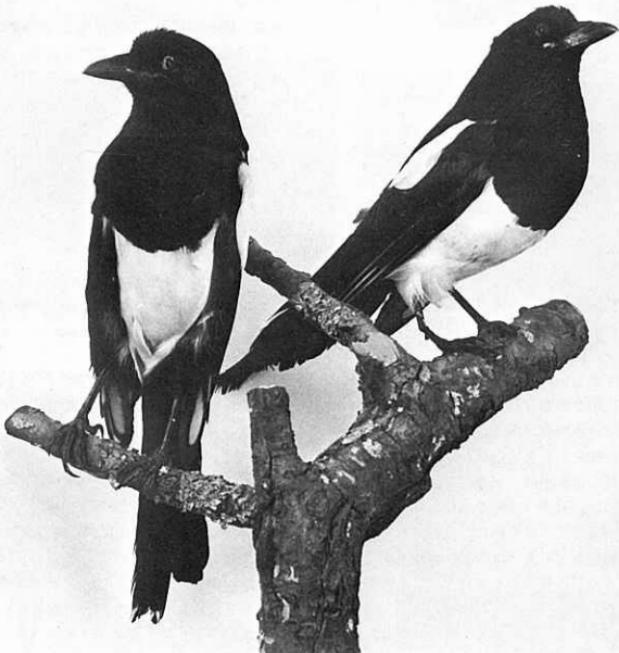


佐賀県立博物館報 №.55

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



カササギ

佐賀平野を中心に長崎、福岡、熊本の各県の一部に留鳥として生息している。世界的には大陸に広く分布する野鳥で、我が国ではこの地域だけしか生息していないことについて残存説、自然復来説、移植説など諸説がある。一般には豊臣秀吉が大陸出兵の時、肥前佐賀藩祖鍋島直茂、筑後柳川藩主立花宗茂がそれぞれ持ち帰って放鳥し、保護したといわれている。

漢字では「鶲」と書く。韓国では「カチ」と言うので、佐賀では「カチ」という意味で「カチガラス」と呼ぶようになつたとも考えられる。

人家の近くに住み県民に親しみの深い野鳥である。庭木や、公園の樹木にも営巣する。限られた地域の野鳥として、全国的に学術的にも注目され、大正12年3月その生息地が、国の天然記念物として指定された。昭和40年5月には「佐賀県の鳥」にも指定されている。

近年、県や研究者が実施した生息分布調査の結果、戦後は、地域環境の変化から、市街地、村落地から山麓地帯へと移動する傾向がみられた。一時期その数も減少したが、最近は回復しつつあるといわれている。

生活する場所は市街地、村落、田畠、山麓地であって、山間地帯にはみられない。他のカラスの仲間に比べ、飛翔力、行動力もあまり大きくなはない。

目 次	○カササギ (佐賀県の鳥)	1
	○佐賀県に棲むカラス科の野鳥	2 ~ 3
	○資料調査メモ 勇猛寺の俱利迦羅竜王碑	4 ~ 6
	石造地蔵菩薩半跏像	6
	○佐賀県内所在博物館等施設紹介	7
	○博物館日誌・行事のお知らせ	8

佐賀県に棲むカラス科の野鳥

カラス科の野鳥は、いずれも頭のよい野鳥で、体色が美麗の割に声はよくない。県内には次にあげる7種が知られている。

ハシブトガラス

ハシボソガラス

カケス

カササギ

オナガ

コクマルガラス

ミヤマガラス

このほか国内のカラス科にはワタリガラス（北海道）、ホシガラス（高山、亜高山地帯に棲む、九州では祖母山など）ルリカケス（鹿児島県奄美大島、徳之島だけ、国指定天然記念物）の3種がある。全国的にみて10種のうち、県内では7種のカラス科がみられるわけであるが、表紙で説明したカササギ以外の6種について、県内で生息する実態はそれぞれ異っている。

ハシブトガラス・ハシボソガラス

留鳥で一般にはこの2種は区別しない。漢字では鴉、鳥の2つがある。俚諺や、諺にも出てくるように利巧な野鳥で、人間の生活とのかかわりが深い。

鳴き声とクチバシが両者を区別しているが、慣れないと区別するのはむずかしい。またいろいろ変化した鳴き声もるので一層、声だけではむずかしい。またこの両者は一緒に生活している場合が多い。

巣は高い松、杉の枝分かれをした下からのぞかれない場所につくる。写真にある巣は、三瀬村で採取したもので、一卵が残っていた。普通4.5卵を生む。巣は棕梠や細かい木の根を敷いてくられていた。巣内にはイチヂの毛、猛キン類の胸毛などもあったので、カラスがヒナを育てる時期にはこれらの動物をも捕食することが考えられる。

県内のカラスは山間、山麓の松林、杉林の繁茂した森で繁殖し、またその周辺を「ねぐら」にして、昼間は10キロ、15キロの行動圏で動き回る。従って昼間では、村落、市街地でもその姿をみるとことが出来る。

食性は雑食性であって、植物質もかなり好むようである。一方豆、麦、西瓜、果実などの農作物も荒す。昆虫、残飯、腐肉、魚骨などもよく捕食する。カエル、イナゴ、バッタ、野ネズミなども好み、時にはヘビ、ウサギや小鳥類も捕食する。漁港やごみ捨場によくみかけるのは、このような食性によるもので、農作物に被害を及ぼす有害の面もあるが、害鳥獣を捕食するとともに、地上の清掃、浄化の働きも充分考えられる食性である。

カケス

留鳥、県内の山地には珍しくない。山麓よりや、深い山地で生活している。ヤマガラスの別名があつて、人間が近づくと、木立のどこからともなく「ゲー、ゲー」と

悪声で鳴き、人の近づくのを警戒する。美しい色のカラス科であるが、地声は悪い。時にはトビなど他の鳥のなまねもする。

雑食性でドングリ、カシの実が特に好きでカシドリの別名がある。ハトぐらいの体であるが粗暴で、他の小鳥のヒナや、卵などをかすめる。県内山間地によくみることが出来る。

カササギ（表紙参照）

オナガ

留鳥、昭和20年代の初めまでは福岡県久留米、柳川から本県内の三養基郡南部、神埼郡南部、佐賀市内にかけて相当数が生息していた。昭和25年頃は佐賀市内でもみられた黒と灰褐色の美しい野鳥で、写真は昭和31年12月神埼郡内で採取した資料である。記録によれば県内では昭和31年10月神埼郡千代田町で観察されたものが最後となっている。九州では昭和33年久留米三本松動物園に飼われていた九州最後のオナガが、ネコのため昭和39年9月13日死亡したとの記録がある。全國的にも本州中部以東、関東地方に多く、現在は岐阜、愛知以西では分布しないらしい。減少、絶滅の原因ははっきりしないが雑食性であるため他のカラス科の食性との関係や、集落周辺の森林の減少のため好適な生息地が減ったことなどがあげられている。

コクマルガラス・ミヤマガラス

コクマルガラスは中国、韓国などの大陸には多い。冬に逆行するので冬鳥よりもしお迷鳥である。体はハト位で、黒色型と淡色型があって、淡色型はカササギによく似ている。写真の標本は昭和36年12月、神埼郡三瀬村で採取したもので、当時全国では13番目、九州では4番目の確認資料であった。昭和41年3月6日の北山ダム探鳥会の席上において、会員によって確認された。その後昭和40年の後半から50年にかけて、県内や長崎、熊本両県でも確認されるようになって、現在では相当数のコクマルガラスが飛来してミヤマガラスやハシブトガラス、ハシボソガラス、カササギなどと群生しているらしい。

ミヤマガラスは冬鳥で11月中、下旬から12月上旬にかけて、昭和10年代の佐賀平野には数千羽の大群が押寄せてきた時代がある。近年では三瀬、脊振の山地特に北山ダムの周辺、東松浦郡、唐津市、伊万里市の山地で300羽程度がみかけられる程度に減少した。妻をまく田圃によく降りていたのでタンボガラス（また千羽ガラス）の別名がある。体はハシボソガラスよりも小さく、クチバシの基部に灰白色部がはっきりみられる。鳴き声もハシボソガラスより細かくて弱い感じのものである。北部九州に渡って来た数千羽の大群の集団の一部は本州、四国へ移行していた。近年ミヤマガラスの減少はオナガの絶滅とともに自然環境の変化によるものであろうが、僅かに7種のカラス科の仲間ではあるが、生き伸びる自然界のむずかしさが立証される好例である。



◀ハシブトガラス



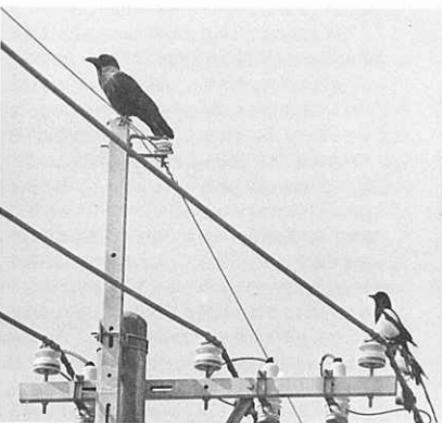
ハシボソガラス▶



▲ハシブトガラスの巣

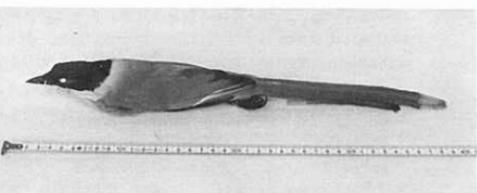


▲コクマルガラス



◀コクマルガラスとカササギ
(佐賀新聞社提供)

▼カケス



◀県内最後のオナガ標本
(昭31.12.1採取)

資料調査メモ

勇猛寺の俱利迦羅竜王碑

杵島郡北方町大字大渡字永池3812番地

勇猛寺は杵島山系の北端、標高160メートルの山腹にあり、山号を月輪山と称する真言宗の寺院である。本寺は縁起によれば、聖武天皇の勅願により天平15年(743)に勅使として遣された橘文貞が、七堂迦藍並びに三十六坊を建立したことにはじまるといい、藤原時代末期には平重盛との深いかかわりを伝えている。

しかし、残念ながらそれを証する古文書等の資料は現存していない。勇猛寺の存在を裏付ける最古の資料としてこれまでに判明しているものは、本堂に保存されている瓦片である。この瓦は本堂裏手の山中から採集されたものであるが、布目や、格子目文様の叩き跡を残した平瓦の破片で、平安時代に焼成されたとみられるものである。次いで、藤原時代の終わり頃の建立と考えられているこれから記す俱利迦羅竜王碑である。他は時代が降って戦国の動乱期、元亀3年(1572)銘六地蔵があり、江戸時代になると僅かではあるが本寺にかかる文書が残っており、それと併せ境内には歴代住職の墓、慶安3年(1650)の庚申碑、延宝3年(1675)の大神宮碑、享保11年(1726)の大乘妙典一千部供養碑が寺歴を物語つ



▲ 俱利迦羅竜王碑

ている。本堂須弥壇には、江戸時代とみられる各々木彫の本尊千手観音が中央に、向かって左不動明王、右に弘法大師像が安置されている。

ところで、俱利迦羅竜王は不動明王の化身とされ、明王の持物である剣に竜がまといつた姿であらわされる。これを刻んだ石碑は本堂に向かって左前方、道路より一段高い境内庭先に建っている。

この碑に関しては、幕末に、当地の熊野神社の神官であった森日向氏が調査して熊野權現社旧記に記していたというが、今では散失してしまっていてその内容は判らない。降って、昭和25年5月に松尾賛作・山口良吾両氏が調査され、「仁安3年銘の俱利迦羅不動碑」として報告されている。その後も幾人も識者のこそこを訪れており、近年では多田限豊秋氏が調査の所見を「九州の石塔」佐賀県の部に概述され、その中に藤原期の彫刻として高く評価されている。

しかし、本碑の表面は長い星霜を経、多く磨滅していて、この竜王の像容には不明な点が多く、したがって、いずれの報告にも詳しいものがなかった。山口良吾氏は先の報告の中で「……細部は今なお観察研究中であるが、中部と下部とが不明でなかなか研究が進まない。」と述べておられる。筆者は去る11月20日、北方町々史編纂室のご協力を得、本碑の拓影を撮ることができたので、それにしたがって像容の判明した分を概説してみたい。

この碑の用材はこそ勇猛寺の周辺から産出する安山岩である。これを自然石のまま利用した当碑は地上高206センチ、中央部で約90センチ、同厚さ約50センチを測る。このほか基部を若干地中に埋めて建てているので、本来はかなりの長大な石であろう。この石の平滑な面一ぱいに俱利迦羅竜王を本尊とし、矜羯羅と制吒迦の二童子を脇侍とした像容が線刻されており、今、この面は道路側(南南西)を向いている。

さて、俱利迦羅竜王の像容であるが、その表現は輪郭を細線で陰刻し、像の外方、すなわち童体・剣・火焔・童子以外の部分を僅かに彫り下げ、像容の部分が薄く盛り上がるような表現法をとっている。全体の構成は先にも触れたように宝剣を直立させ、それに俱利迦羅竜王がまといつたもので、その下方左右に制吒迦・矜羯羅の二童子を従えている。

これを詳細に見るならば、先ず中央に直立した宝剣を配する。これは三鈷のある柄を下方にし、続いて劍身がのび、垂直に立つ。童体は劍身を二重に巻き登り、頭部は剣の切っ先の上方で反転して口を大きく開き、切っ先から剣を噛み込もうとする通形の姿をとっている。劍身に巻きついた童体は背稜、すなわち背筋に当たる部分は鋸歯状の突起を連続してあらわし、続く背部は円弧を幾重にも接続して重ね、個々の円弧の中に点状の刻みを入れて鱗としている。腹部には二条の横線を喉元まで刻むとともに、その間には4・5本の短い縦線を入れて腹部

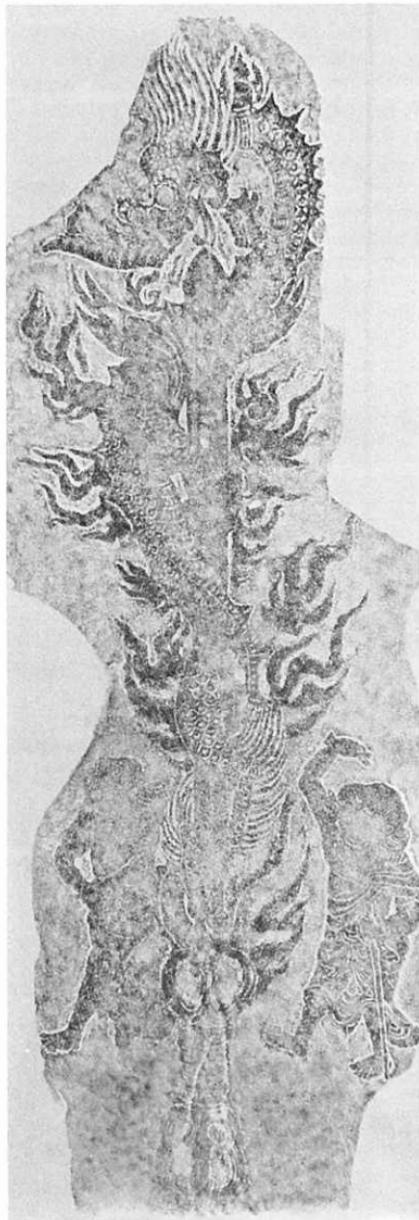
の鱗とし、背部のそれとの違いをあらわしている。こうして表現された童体の背・腹は、あるいは反転し、又は左右にうねって宝劍にまといつく様をリアルにしている。童体が下方から剣の手前を通って左に出、更に裏側をまわって右に向かい、剣に最後にまといつくところに体部の形制から離れて鱗状の彫りが僅かに見てとれるが、これは足の大腿部と思われる。竜は4本の足をもつとされるが、これは、その位置からして前肢であろう。他の足の配置はよく判らない。

碑面上段には頭・顔部が右向きの側面観として描かれている。鱗の間から生じた長い頭毛十条は、ゆれ動く焰のように逆だて、眼球は円形に大き目につくる。鼻孔は眼球の前方、顔面端の「八」字形をした2個の刻点であろう。大きく開いた口は、剣の切先から呑みこもうとする形姿にあらわされている。それを強調するためにか喉奥から出した舌先は2つに裂けてうねり、また、口からは火焰を遠く前方へ吐き出している。数本の歯と牙、それに髭の生えた下顎は、今にもはぜんばかりに大きく開いている。そして、この図像では最も高い位置に当たる首の上に竜王の象徴ともいるべき火焰宝珠が配してある。この宝珠を得ればすべてが意の如く成就するとされる宝珠である。宝珠の下部からは首を巻いた横縞のある帶状の表現があるが、これは首への宝珠の取りつけをあらわしたものであろう。竜王の体からは四方へ渦巻き、燃えさかる火焰があらわされている。

次いで、下方に目を転ずると竜王の左右に童子像が線刻されている。彫法が先の竜王像と同様に見なされるところから同一時期の制作と見てよいであろう。童子像は俱利迦羅竜王が不動明王の化身であることから、不動明王の脇侍である矜羯羅童子と制吒迦童子を配しているのであろうが、二脇の童子のうち、向かって右側に彫られた像が割合明瞭に見えるので、それから述べることとする。

この像は総高47.0センチ、持物や形姿から制吒迦童子とみられる。体躯の肉どりはやや豊かさに欠ける。左肩から右脇腹へ天衣をかけ、腰に袴をまとい、左腕上膊には腎鉗（しんせん）も見える。左手で金剛棒、振り上げた右手には持物（三鈷杵か）を執る。頭髪は肩まで垂らして端を巻き毛（施毛）に整え、膝にかかる袴の襞は童子の自在な動きを表現している。しっかりと地につけた左足、踵をつければつま先を浮かしている右足、こうした足の配りにはスマーズな重心の移動が感じられ、足を交互してまた一步前に進もうとする姿にあらわしている。左足の五指の表現も巧みである。本像は斜上方からやや見下す視点にたって描かれており、童子の像容は写実的で優れている。残念なことに、顔部は磨耗していて面相については記すことができない。

いっぽう向かって左側の矜羯羅童子とみられる像であるが、これは竜王の斜後方に立つようにならわされているた
勇猛寺俱利迦羅竜王の拓影▶



めに、左側が一部陰になる構成である。加えて風化磨耗が激しいので像容については不明な点が多い。判明するのは右体側の線である。それによれば像高46.0センチ、右手を腰に置き、両足を左右に開いて立つ姿のようである。腹前には左肩方向から右脇腹へかけ斜線が走るが、これは天衣をあらわす輪郭線の一部であろう。あるいは矜羯羅童子の持つ蓮華の枝である可能性もある。

ここで、本像の特徴を掲げれば、前にも記した通り像容の輪郭を細線で陰刻し、その外方を薄く削り取って像の各部を僅かに浮き出させ、個々の像については線刻を加えて姿を更に詳細にした彫法である。そのほか、表現法は12・3世紀頃、密教像を肥瘦のない墨線で描いた白描画に相通するものがあり、描線にはよどみがなく藤原時代の仏画を想わせるものがある。ただ、火焰の描写には形式化を感じる。

最後に、本像同様の石造俱利迦羅竜王について類例を求めるならば、九州では他に例を知らない。丸彫された石造俱利迦羅竜王は、一般には江戸時代になって出現し、広く大衆に信仰されて作例も増加してくるが、この種のものとは図像の構成や彫技が本質的に異なり、制作された時代の相違をしめしている。木彫の俱利迦羅竜王は、大分県国東の小武寺に伝存している。像高183.2センチで鎌倉時代の制作とされており、勇猛寺像とほぼ同大である。九州には俱利迦羅竜王の作例が乏しいが、この像は勇猛寺像を参考するうえで示唆に富むものであろう。制吒迦童子の側面には「仁安3年4月15日勧進僧教豊」の刻銘があるが、これは書風の趣きや干支を欠く書式などから後世の追刻と見る人もある。

以上、像容について概略を述べたが、仏画等を含め他の類例との比較考察は後日を期し、取り敢えず調査の報告とする。

文献

「勇猛寺の俱利迦羅不動碑」山口良吾 佐賀県文化財調査報告 第一輯 昭和27年

「九州の石塔」多田限豊秋 西日本文化協会
昭和50年

石造地蔵菩薩半跏像

北茂安町大字東尾字大塚

今、本像は大塚康正氏宅裏山の斜面、竹林の中に一隅を設けて祀られている。以前は、この裏手山の台地上に築成されていた小さな塚（小円墳か）の前に建てられていたものだというが、崖の崩壊で土砂と共に転落埋没していたものを、60年前に掘り出して現在地に奉祀したと伝えられている。

この地蔵は将棋の駒形をした地上高約90センチ、幅約70センチ、厚さ約18センチの安山岩に半肉彫りされている。

像容は右手に錫杖を持ち、左手には宝珠を奉持し、台座上に左足を垂下して坐った半跏像である。像高は頭頂

から足先まで59センチ、二尺像としてつくられたものであろう。

像は面奥が5.9センチに達するほど周縁部の彫りが深いので、浮き出て量感に富む。や面長な顔は、白毫と鼻孔の位置でほぼ三分し、目が額部中央に来るよう配位置している。静かに閉じた目、結構んだ口元からは慈愛に満ちたやさしさを感じられる。肩は丸味をもった撫肩である。右手は肘を曲げ胸前で錫杖を執る。錫杖についてみると錫杖頭は中を彫り窪めてあらわし、それに懸る六輪は周囲を彫って浮き出るようにあらわしている。杖の部は、肩から胸に到る部分を陽刻し、腹前では二条の線刻とし、肩から錫杖頭の間は表現を省いている。宝珠は左手第1・3指で拳持し、肘を曲げて腹前に置く。衲衣は通肩に着け、それにかかる衣文は袖口に平行するように肩から下方へ流し、裾は大きくうねらせ整え、腹前の衣文は4本の沈線を弧状にし等間隔にあらわしている。

本像と隣接する東尾字小原の地蔵像との間には面貌、とりわけ目鼻立ちや眉・口唇、それに各部の割付け方、更には体軀の肉どり、及び彫技などに酷似するものがあり、同一工房の手に成るか、あるいは同一工房で制作されたものではないかと見られる。

造立の時代は、近傍に

千栗大師堂 応永2年(1391)

中津隈墓地 応永31年(1424)

西尾薬師堂 応永(1390~1427)

があり、筑後川を隔てた対岸久留米市にも

寺町医王寺 応永5年(1398)

高良内町字上の山 応永11年(1404)

山川町岩井川 応永11年(1404)

京町日輪寺 応永22年(1415)

大善寺町称名院 応永28年(1421)

といった地蔵があるが、これらの地蔵とは彫技や各部の像容に共通するものがあり、また、高良内町の地蔵や、千栗大師堂の地蔵に刻まれた講衆と思われる氏名は、この地方に地蔵講といった集団の成立とその信仰の隆盛を推察させる。この地蔵には造立銘こそないが、こうした地蔵信仰の所産と考えられ、15世紀代を中心とした時期に造立されたものと推定される。

文献「久留米市史第1巻」久留米市史編纂委員会



県内博物館案内（その11）

呼子町歴史民俗資料館

- 所在地 東松浦郡呼子町加部島 〒847-03
- TEL (09558) 2-3347(田島神社社務所)
- 交通の便 呼子町中町ふ頭より加部島行き渡船で10分（1日13便）
- 常時開館はしていないので、参観者は事前に田島神社社務所へ連絡のこと。
- 入館料 無料
- 環境と歴史

東松浦沿岸地方は海に浮かぶ島々と、入り口の多い海岸線とをひかえ美しい自然と風土に恵まれている。その中の1つ加部島は呼子港の北に面し、周囲12km、人口約800人の小さな島である。島は玄武岩台地でなだらかな丘陵が広がっている。

加部島の歴史は古く、前方後円墳「瓢塚」をはじめ、多くの古墳があってこの島が古代から繁栄していたことを示している。

ここにはまた、延喜式内社、肥前国四座のひとつである田島神社がある。祭神は田心姫命、多喜津姫命、市杵島姫命の宗像三女神で、ここが朝鮮への海路にあたることと密接な関係があり、航海の安全を祈って祭られたものであろう。佐用姫伝説にまつわる望夫石は境内の一隅にある佐用姫神社の神体となっており、元寇のさい蒙古軍船が碇石として使用したといわれる巨石も保存されている。

加部島に着き、加部島漁港の船着場の石段を上り参道にかかると、安山岩製の明神鳥居がまず目にとまる。この鳥居は「小川島捕鯨組」を組織した人々やその関係者の名が刻まれている。界隈捕鯨の隆盛と航海安全を祈念して建てられたものであろう。

小川島捕鯨の歴史は江戸時代に始まり、捕鯨活動は小川島、加部島、加店島、松島、馬渡島、神集島の周辺地域を漁場として行われた。明治11年小川島捕鯨事業の復興をめざし、当時の長崎県令の援助をうけ「小川島捕鯨組」が組織されたが、その後明治21年に「小川島捕鯨会社」、明治32年には「小川島捕鯨株式会社」と改編し、明治43年には鯨を解体する「解剖場」が小川島から加部島の片島に移され、ここが捕鯨の一大基地となった。大正

7年頃には今の加部島渡船場東側に移転し昭和23年まで続いた。

また、豊臣秀吉が天正19年朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の基地とした名護屋城（現東松浦郡西町）の全貌を描いた、当代の著名な絵師狩野光信も同島を訪れて、主にここからの観察で六曲一隻の大作「肥前名護屋城図屏風」（佐賀県立博物館蔵）を描いている。

呼子町、とりわけ加部島はこのような古代の文化をとどめ、また長い歴史の中で培われた郷土発展の足跡を残している。

○設立の経緯と特色

呼子町歴史民俗資料館の建設は、呼子町の文化財保存の熱意により、肥前国最古の大社といわれる田島神社境内に昭和51年原電三法の交付金を財源として着工。構造は鉄骨コンクリート造り。床面積66平方メートル。建築費574万円で昭和52年落成した。

収蔵資料は田島神社の社宝（正安の紀年銘のある木彫鼻高面、備中国住人吉次作の太刀）の他、玄界灘に面する東松浦地方での勇壮な捕鯨活動をしのばせる「小川島捕鯨関係資料」、また古墳時代後期に比定される瓢塚古墳（加部島の北東に所在する前方後円墳）からの出土品、町内民家に伝わる宝物や家具など250余点もの資料が保管展示されている。

古くから朝鮮とのむすびつきを物語る史実や伝説に色々な島にふさわしく、田島神社の社宝を中心に、郷土の文化財に対する認識を深め、東松浦半島でも珍しい歴史民俗資料館としてこれから活動が期待される。

○主な展示品

- 正安の紀年銘のある木彫鼻高面
- 備中國住人吉次作の太刀
- 瓢塚古墳出土品（須恵器、土師器、鐵鎌、刀など）
- 小川島捕鯨関係漁具（大切庖丁、はらい両手切庖丁）
- 古文書



▲展示風景



◆資料館全景

博物館日誌 (S 56・4・1~12・13)

4月1日	人事異動	8月5日	書作家協会展 (9日迄)
4月18日	古賀忠雄彫塑展・山口猛彦洋画展 (5月10日迄)	8月21日	九州新工芸展 (30日迄)
5月16日	二科展 (6月7日迄)	9月3日	よみがえれ佐賀展 (6日迄)
6月18日	佐賀美術協会展・山口亮一生誕百年記念展 (28日迄)	9月13日	理科作品展佐賀市支部展 (17日迄)
7月1日	緑光会展 (5日迄)	9月19日	理科作品展佐賀県本展 (25日迄)
7月8日	常設展「佐賀県の歴史と文化展」(9月27日迄)	10月8日	近代の日本画展 (11月3日迄)
7月15日	二科会佐賀支部展 (19日迄)	10月17日	第2回佐賀新聞学生書道展 (25日迄)
7月22日	独立C・S展 (26日迄)	11月1日	移動博物館 (塙田町 3日迄)
7月24日	博物館協議会	11月14日	佐賀県美術展 (23日迄)
7月28日	博物館実習 (8月7日迄)	11月28日	佐賀県高等学校芸術祭書道・美術部門展
7月30日	七夕書道展 (8月2日迄)	12月13日	常設展「佐賀県の歴史と文化展」(58年3月31日迄)
			佐賀県学童美術展 (18日迄)

行事のお知らせ

常 設 展 (原則として月曜及び祝日の翌日休館)			
佐賀県の歴史と文化展	12月13日(日)～57年3月31日(水)	大人 50 (30) 大・高生 30 (20) 中・小生 20 (10)	佐賀県の自然史、考古、歴史、美術、工芸、民俗の各部門の資料を展示し、佐賀県の歴史と文化を紹介。

企 画 展 (原則として月曜及び祝日の翌日休館)			
展覧会名	会期	観覧料 (内は団体料金)	内 容
書 初 展	1月17日(日) ～1月21日(木)	無 料	小・中・高校生及び一般公募の書初展
佐賀県労働者美術展	1月30日(日) ～2月4日(木)	無 料	佐賀県が県内の労働者から公募した美術展。日本画、洋画、写真、書、工芸約250点
九州グラフィックデザイン展	2月 9日(火) ～2月14日(日)	無 料	九州及び沖縄のグラフィックデザイン作家による作品約100点
佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展	2月20日(土) ～2月24日(木)	無 料	佐賀大学の卒業制作品、絵画、彫塑、工芸の各部門を展示
岩永京吉・太田香雲展	3月11日(木) ～3月14日(日)	無 料	佐賀大学を退官される岩永京吉先生の日本画と太田香雲先生の書を一堂に展示

都合により上記計画を一部変更することがあります。



博物館報	第 55 号
発行年月日	昭和 57 年 1 月 10 日
編集発行	永原正隆
	佐賀市城内1丁目15~23
印 刷	佐賀県立博物館
	佐賀印刷社